吉蔵の成仏不成仏観

末光愛正

序

既に『法華玄賛』と『法華義疏』[1]と題して、①法相の基（六三二―六八二）の『法華玄賛』が、吉蔵（五四九―六二三）の『法華義疏』を引用している事、②又『大乘法苑義林章』も『法華義疏』を引用している事実を論じた。この論文を書いた動機は、『国訳一切経』の「妙法蓮華経玄賛解題」の解題者が、①『法華玄賛』が『法華義疏』を引用している事実を全く認識していない事、②『法華玄賛』が天台の法華疏である『法華玄義』や『法華文句』を参照している具体的事実を論証せずに、③「其の内容を通読すれば自から明らかであろうと思うが、天台家に対する対抗意識が濃厚に働いていたことは争れぬ事実であろう」[2]と、『玄賛』が天台疏、天台思想に対して対抗意識を燃やしていたと論理を展開し、結論づけたことにある。この主張を云い換えれば、法相の思想は天台の思想に強い影響を受けて成立していると云う事を暗に主張したと同じ意味を持ち、天台思想の影響力の偉大さを示唆した内容とも受けとれる。

しかしこの様な主張をする為には、『玄賛』が天台疏を参照していると云う明確な論証が少なくとも大前提であったはずである。特に近年『法華文句の成立に関する研究』と題し、法華文句等の天台疏の成立に対する詳細な論述がなされた。即ち「智顗撰と伝えられる現存註疏の多くが、智顗の著述であり得ないことは勿論、その講説を門人が筆録したものというのも多分に疑わしく、むしろ灌頂その他の門人によって、吉蔵疏の成立以降に、これを参照し依用して書かれたことを証するものである」[3]と、天台疏の成立が、灌頂（五六一―六三二）以後の門人によって書かれたものと問い質されている現在、『玄賛』が天台疏を参照したかどうかを論証する事が出来て、初めて解題者の説も論争の土俵の上に登ることが出来

る。

別に三論至上を主張する訳ではないが、三論と法相の思想的影響関係は存在するのであろうか。少なくとも『法華玄賛』と『法華義疏』の論文の内容により、引用関係は論証出来、影響関係を論じる前提条件は揃えた。そこで両者の間に、思想的な共通点があるかどうかが、次の論議の内容となって来る。『玄賛』の解題者は、法相の「五性各別」思想も、天台家に対する対抗意識の強烈な一例としている。(4) 法相の「五姓各別」の様な完成されたものではないとしても、吉蔵の思想の中にも基本的な骨子としての五姓各別思想的なものを見い出すことが出来る。そこで吉蔵の成仏可能な不定性の思想に関してと、又成仏出来ない決定声聞と増上慢声聞の思想を中心に、以下論じてみる。

一　不定教の否定

慈恩大師基の一乗観に関して、

さて、以上のような一乗教説に対する慈恩教学の見解を通約するならば、一仏乗の所説は、三乗不定姓の根機がややもすれば二乗地に止どまらんとする卑屈心を、勧発誘引せんがために仏が密意の方便を以て説いたものとするようである。（『天台学報』第六号、昭和三八年度、藤隆生「三乗唯識の一乗観」六六頁）、

従って唯識では、法華経の一乗説は、不定姓の菩薩（現在声聞身或いは独覚身である場合もある）が法華の教によって本来有する菩薩の本有無漏種子を開発して仏果を期するのが目的であると見るのである。（『仏教学研究』竜谷大学仏教学会、第二五・二六号、昭和四三年五月、山崎慶輝「法相唯識における法華経観」四二頁）。

と、指摘が既になされている。即ち唯識の慈恩教学が、法華教の一乗教を以て、不定姓を菩薩に誘引し、仏果に至らしめるものであると考えるならば、吉蔵の思想も正にそのとうりである。吉蔵の『法華義疏』には、

而も此の経が一切の二乗を会して以て成仏せしむとは、蓋し是れ応に悟るべきの人に対するが故に、此の経を説いて破及び会の義を明すのみ。（巻第八、T三四・五六六上）

と、此の法華経は二乗の全てではなく、悟る人のみを対象としていると主張する。以下論ずるごとく、悟る人とは不定姓の廻小入大の菩薩のことであり、吉蔵の法華の註釈の対象のほとんどがこの不定姓の菩薩の事についてとなる。不悟の人とは、決定声聞と五千の増上慢の声聞である。

所で今、「不定姓」に関して論じるまえに、「不定教」について検討しておく必要がある。吉蔵が声聞蔵と菩薩蔵の「二蔵説」を説く事は、既に指摘されている。(5)『勝鬘宝窟』には、二蔵説を主張する前に南土の三教五時説を紹介している。

南土の人は云く、教に三種あり、一に頓教、二に漸教、三に無方不定教なり。頓教とは謂く、華厳の流。漸教とは鹿苑に趣くより乃し涅槃に至るまで、五時次第する、之を目けて漸と為す。三に無方の教とは前に出す二種の外、即ち勝鬘等の経是れなり。（後

略)、(巻上之本、T三七・五下)

即ち華厳の頓教と、鹿園から涅槃までの漸教と、勝鬘経等の無方不定教の説である。この南土の説に対して、「三教五時は今の所有に非ず」[6]と否定し、次の様に二蔵説を主張する。

菩提留支度りてより後、即世に至るまで、大に仏教を分って半満両宗と為す。亦声聞菩薩二蔵と云う。然して此れ既に経論の誠文あり、排斥すべからず。但、衆生、二蔵と聞けば則ち大小二心を起す。然れども須らく知るべし、経道は未だ曾て小大ならず。大縁に赴くが故に、強て名けて大とし、小縁に随順するが故に、仮に名づけて小と為す。此の大小に因って、至理の非大非小なるを了悟せしめんとす。然も既に両是に住せず。豈心、二非を存すべけんや。此の大宗を識れば則ち三蔵失なし。(前同、T三七・六上)

つまり、声聞と菩薩の二蔵説、或は大乗と小乗の二乗説を主張する。しかも大乗小乗は、「大縁に赴くが故に強いて名けて大とし、小縁に随順するが故に仮に名けて小と為す」と、機縁に従って仮りに大乗小乗と名けるだけであり、この大小に住せず、非大非小の至理を了悟することが大宗だと説く。

それではこの二蔵説は、どの様な人の為に説くのかと云うことが問題となる。

問う、大小の人の為に二蔵を説くとは、何等か是れ大小人なるや。答う。菩薩に二あり。一に直往の菩薩、二に廻小入大。此の二人の為に菩薩蔵を説く。直往の人の為に説く、亦之を名けて頓と為すことを得。小より大に入らざるを以ての故なり。廻小の人の為に説く、之を目けて漸と為す、其の小より大に入るを以ての故なり。(中略)、声聞蔵を説くも、亦二人の為なり。一には本乗声聞、二には退大取小なり。此の二人の為に声聞蔵を説くなり今此の経は、二蔵の中には菩薩蔵の摂、二菩薩の中には直往の所収なり。彼の七歳已上、未だ曾て小に入らず、頓に大乗を聞くを以て、是の故に名けて直往の人と為す。(前同、T三七・六上―中)

即ち直往の菩薩と廻小入大の菩薩の為に菩薩蔵を説き、本乗声聞と退大取小の声聞の為に声聞蔵を説く。そしてこの勝鬘経は、直往の菩薩の為であると云う。直往の菩薩を「小より大に入らざる」と定義することから、最初から大乗を学ぶ菩薩のこととなり、法相の五姓[7]の内、菩薩定姓、即ち頓悟の菩薩に相当する。廻小入大の菩薩は漸悟の菩薩のことであり、菩薩になる前は、本乗声聞と退大取小の声聞である。

吉蔵も南土の説と同じように、頓漸を認めているが、内容に相違がある。即ち南土の説は、華厳のみが頓教であり、他は漸教か無方教と考え、教えそのものを頓教とか漸教とかに規定してしまう。所が吉蔵は、「直往の人の為に説く、亦之を名けて頓と為すことを得」、「廻小の人の為に説く、之を目けて漸と為す」、或は「頓教は直往の菩薩を化し、漸教は通じて二種の菩薩を化す」[8]とあるごとく、直往の菩薩を化す教えが頓教であり、廻小入大の菩薩を化すのが漸教であり、その機縁によって頓教となり漸教となる。この為吉蔵において

は、華厳教のみが頓教とは限らなくなり、勝鬘経も直往の菩薩を化すから頓教となる。しかしそれだけではない。「漸教は通じて二種の菩薩を化す」と定義するから、般若教も直往の菩薩を化す場合には、頓教となる。

三、亦漸亦頓、則大品教也、為二菩薩一説二大品一、大品於二菩薩一為レ頓、（中略）、而命二小乗人一説二於大法一、為下入二一乗一方便上故、於二小乗人一名為レ漸也、（法華遊意、T三四、六四四下―六四五上）

即ち大品教は、直往の菩薩においては頓教であり、廻小入大の小乗においては漸教となる。この様に、対象の機根により頓教となるか漸教となるかと考えるのが吉蔵の場合であり、南土説の様に、教え自体そのものを頓教とか漸教とかに規定するのではない。

又更に南土説と異なる点は、吉蔵には不定教と云う考えがない事である。吉蔵は説法の対象を声聞と菩薩の二人と考える。この為教えも声聞蔵と菩薩蔵、或は小乗と大乗の二つしか認めない。ここで云う菩薩とは直往の菩薩のことであり、又声聞とは本乗と退大取小の声聞であり、最終的には廻小入大の菩薩の事である。即ち直往と廻小入大の二菩薩しか、説法の対象とならないのであるから、全ての教えは、頓か漸か、或は頓漸を兼ねることになる。この為に吉蔵には、不定教と云う考えは存在しないのである。

二　根性不定

先に廻小入大の菩薩が不定姓に相当すると述べた。『宝窟』の先に引用した廻小入大の菩薩の定義は、「廻小の人の為に説く、之を目けて漸と為す、其の小より大に入るを以ての故なり」と、小乗から大乗に転根する所にその特徴がある。『法華玄論』には「次明二転根一」と云う項があり、その中で、

問、今有二転根義一不、答、毘曇是小乗尚有二転根一、大乗義無レ有二定性一、云何不レ転耶、値二悪縁一故転レ利為レ鈍、値二善縁一故転レ鈍為レ利也、（巻第五、T三四・三九九下）

と、大乗教は、「無有定性」であるから、当然転根を認めると主張する。悪縁に会えば利根から鈍根になり、逆に善縁に会えば、鈍根から利根へと転根することが出来ると考える。

この転根を認める為には、「無有定性」と云う様に、「根性不定」と云う考えがなければならない。『法華義疏』並びに『大乗法苑義林章』が引用している『法華玄賛』中には、随処に「根性不定」の説示箇所がある。以下その内容を記す。

答う、此は根性の不定を明す。一には退して凡夫となるべく、二には住まって二乗となるべく、三には進んで菩薩となるべし。不定を以ての故に。（法華義疏、巻第八、T三四・五七六上）

即ち、声聞が凡夫に堕落したり、そのまま声聞に留まったり、或は努力して菩薩になる事が出来るのは、「根性不定」の為であると説く。又、

答う、初成道の時に拠らば、大機未だ熟さず。是の故に謗を起すべし。霊山の会に至らば、小執を改めて則ち能く信受す。根性不定なるを以ての故に。（前同、巻第五、T三四・五二四中）

と、法華教にて、声聞が小執を改めて大乗を信受するのも、「根性不定」なるが故である。或は、

二には、昔の三乗の根性不定なるに就く。大品の六十の菩薩退して羅漢となり、迦葉は本是れ縁覚の根性なれども仏に値うが故に声聞と成り、声聞の人も若し仏に値わざれば即ち縁覚と成るが如し。不定なるを以ての故に。（前同、T三四・五二二下―五二三上）

と、菩薩が羅漢に、縁覚が声聞に、声聞が縁覚に転根するのも、やはり「根性不定」なるが為である。

以上の様に、吉蔵は「根性不定」を主張する。しかしこれらの例から判る様に、あくまでも「不定」を主張するのであって、その為に良い方にも、又悪い方にも転根する場合を認めるのである。この為に、必ずしも法華教にて、総てが総て廻小入大の菩薩になるとは限らない。これを四句にて示している。

問う、何の因縁の故に同じく小乗教を禀くるも、法華を聞くを得て信解するもあり、聞かざるものもありや。答う、四句を具すべし。一には始め大乗を習学し終にも亦大乗を聞く。此の人懸に信ず。二には始め大乗を習い中ごろ斯の意を忘る。故に初め其の為に小を説きしも小心稍改まるが故に、終に為に大を説く。此の人は法華を聞いて亦信ず。三には本大乗を学し、而して後に大乗を説くを聞いて便ち退いて小を取る。大品の六十の菩薩羅漢と成るが如し。又涅槃経に至って仏性ありと聞くと雖も、而も猶羅漢と成る。此を以て之を例するに、法華を聞くも亦羅漢と成るものあるべし。此の如き人は大を聞いて亦信ずるなり。四には始め小乗を学びて終に大を説くを聞く、此の人多く信を生ぜざるあり。其の小乗を習う日久しきを以て、若し大乗を聞くも其の本心に乖く。故に信を生ぜざるなり。（前同、巻第三、T三四・四九四上―中）

即ち、第一の場合は、終始大乗を学し、法華教を信解するもので、直往の菩薩、即ち法相の菩薩定姓に相当するであろう。第二の場合は、最初大乗を学び途中小乗に転向し、小心改めて法華教を信解する人で、廻小入大の菩薩、即ち法相で説く不定姓・漸悟の菩薩に相当しよう。第三の場合は、終始大乗を学していても菩薩から羅漢となる場合で、法華教を聞いても、必ずしも菩薩にならない場合を示している。しかし「此の如き人は、大を聞いて亦信ずるなり」とあるから、第二の場合に含まれても良いかと思う。第四の場合は、小乗を学び法華教を信解しない者で、決定声聞、増上慢声聞であり、法相の主張する声聞定姓の不成仏に相当するであろう。

この様に吉蔵の思想中には、「法華を聞くも亦羅漢と成るものあるべし」とある様に、必ずしも総てが総て法華教にて菩薩に成ることを認める訳ではない。これは吉蔵の思想の根

本に、経典の意味をどの様に受けとるかは、機根の側の問題であり責任であると考えるからである。例えば法説・譬説・亦法亦譬説に対し、

斯の経は文七軸なりと雖も宗は平等大慧に帰す。但し此の大慧に入るに種種の門あり。或は法説門より入り、或は譬説門より入り、或は亦法亦譬門より入る。若し此の三門に因って大慧に悟入するときは、則ち三種是れ門なり。若し此の三門に因って悟入するを得ざるときは、則ち三種は門に非ず。故に涅槃経(9)に云く、或は甘露を服して寿命長存を得るものあり、或は甘露を服して命を傷け早く夭するものあり。無礙智の甘露とは所謂大乗の典なり。是の如きの大乗の典を亦雑毒の薬と名くと。（法華義疏、巻第五、T三四・五一一中）

と、三周説にて悟入すれば、この説は一乗への門となるが、悟入出来ない者にとっては、一乗への門とはなりえない。甘露を服して薬となる場合もあり、又毒薬となる場合もある。それは甘露、即ち大乗経典、法華経、三周説等の教えの側の問題ではなく、教えを受ける側の機根の熟不熟の問題と考えるからである。衆生の根性は無量であり、それをどの様に受けとるかは衆生の側のことであり、又その結果がどの様になるかは「根性不定」なるが故に、種々の場合が生ずると主張するのである。

三　人法の両縁

この様に「根性不定」なるが故に、菩薩になったり或は羅漢になったりすることをたとえ認めても、しかし法華教にて一乗に導く事が、法華経の役割である。所で拙論「吉蔵の一大事因縁について(10)」中で、「一乗教は則ち是れ発菩提心の縁なり」と吉蔵が主張し、一乗教即ち「法」の意義については既に触れた。又、

問う、法華を信ぜざれば地獄に入り信ずる者は仏に作るといわば、今五逆破戒の人あって法華を信ぜんに仏と作ることを得るや不や。持戒にして法華を信ぜざらんは地獄に堕するや不や。答う、五逆の人は不定なり。若し善友に値わば、閻王の如く、滅罪して作仏するを得ん。爾らざる者は、此の経を信ずと雖も地獄を免れず。持戒の人も、此の経を信ぜざれば亦地獄に入るなり。（法華義疏、巻第六、T三四・五四二上）

と、結言で引用するのみで、「法華を信じ善友に会えば成仏出来る」と述べるに留まった。即ち「若し善友に値わば」とある様に、世尊と云う「人」と、発菩提心の縁となる一乗の「法」の両縁に会うことが、法華教にて廻小入大の菩薩となり成仏出来る条件と吉蔵は考える。

先に「転根」について触れたが、その中で「値二善縁一故転レ鈍為レ利也」と云う「善縁」とは、この場合人法の両縁にほかならない。『宝窟』中には、「覚」について次の様に述べて

いる。

問う、其の人、何れの時覚むるや。答う、其の人、内に仏性あり、外に諸仏の法華経を説くに値いて、小を廻らし大に入ることを得。此の時を覚と名づく。（巻下之来、T三七・八八上）

即ち内に正因仏性があり、更に「諸仏の法華経を説くに値いて」と云う、諸仏と法華経の人法両縁に会い、そして縁因仏性を満す時、廻小入大の菩薩になると説く。

又『勝鬘経』には「不レ愚二於法一」[11]と云う文がある。この文を『宝窟』は、

今謂く、然らず。二乗自ら四智究竟涅槃満足と謂う、此は是れ愚法の時なり。後に善友に値い、一乗を説くを聞いて不愚法を得。（中略）、声聞に二あり。一に愚法の人、二に不愚法の人。現在時中、種性の声聞、小を執して大に迷うを、名けて愚法退菩提心の声聞と為す。小を知り大を解するを不愚法と名く。（巻下之本、T三七・五九下）

とやはり、善友と一乗と云う人法両縁に会い、廻小入大する人を不愚法の人と主張している。

それでは法華教を聞くと云うことが、二乗にとってはどう云う事なのか。

二乗未だ法華を聞かざれば、並びに是れ愚法なり。又竜樹の云く、阿羅漢は三界の外、浄土の中に生じて、法華経を聞いて方に乃し作仏せんと。[12]亦是れ其の証なり。経論を以て之を験す。故に知る、未だ一乗を聞かざれば、則ち自ら究竟と保す。若し一乗を聞かば則ち自ら作仏を知る。（宝窟、巻下之末、T三七・八〇下）

即ち一乗を聞かないうちは、二乗は自らこれを以て究竟であると思い込んでいる。しかし法華の一乗教を聞くに及んで、作仏を知り、愚法から不愚法にと転換する役割をなす。

所で吉蔵は「不愚」に関して次の様に分類している。

二種の不愚あり。一には後業不愚、二には初業不愚。後業不愚とは、羅漢果を得竟って、善友に値い、一乗経を聞き、廻心して大を信ず。故に大法に愚ならず。（中略）、二に初業不愚は即ち四依の人を名けて初業と為す。一乗経を聞き、小を廻して大を信ず。法華に亦二人あり。一には果人不愚。謂く、身子等、一乗経を聞いて自ら作仏を知る。二には因人不愚。謂く、二乗の心を発す人、法華経を聞いて、廻心して大を信ず。略して始終二種の不愚を挙ぐ。中間定まりなし。（前同頁）

これらのいずれの場合も善友から法華教を直接聞く必要がある。所で身子（舎利弗）等は、釈迦と直接接することが出来、釈迦より直接法華教を聞く事が出来るから問題はない。しかしそれでは、釈迦の滅後の弟子は、釈迦より直接法華教を聞く事が出来ないからどの様になるのであろうか。それに対し吉蔵は、来世において、仏より法華教を聞くことが出来ると考えている。

問う、愚法の人、何れの時に不愚なるを得るや。答う、愚法の人は、未来無余涅槃の後、心想生ずる時、仏に値い法華を説くを聞いて、方に法に於て不愚なるを得。故に法華の化城品に云く、我

が滅度の後、復弟子あり、是の経を聞かず、自らの所得に於て滅度の想を生ず、我れ余国に於て仏と作り、為に是の経を説いて仏慧に入ることを得しむと。(13)（宝窟、巻下之本、T三七・五九下）

即ち未来世において、仏から法華教を聞く事が出来ると考え、「化城品」の文を引用している。

「化城品」のみならず、「方便品」中にも、「若遇二余仏一、於二此法中一、便得二決了一」(14)等の同じ内容の文がある。この内容は、阿羅漢果を得て、これが最後身であり究竟涅槃であると思い込み、阿耨多羅三藐三菩提を志求しない者でも、仏に会えば一仏乗を信ず。しかし仏滅度後、現前に仏が存在しない時は、この限りではない。しかし仏滅後、若し他の仏に会えば、この経を信解すると云う内容である。この文に対し吉蔵は、次の様に註釈する。

疑う者の云く、此の羅漢は既に法華と及び解義の人とに値うことを得ず。何れの時に当に一乗を信ずべきやと。是の故に釈して云く、此の羅漢は三界外の浄土の中に生じ、更に余仏に遇い法華経を聞いて方に決了することを得んと。決了とは三一の有無と及び権実とを知るなり。（法華義疏、巻第三、T三四・四九八下）

即ち「疑う者」が、仏滅後の羅漢は、法華と解義者の両縁に会うことが出来ないが、どうなのかと心配した訳である。この答として、仏滅後の羅漢は、三界外の浄土に生れ、余仏に会い法華を聞くと云う。そして三乗一乗の権実・有無を知り、来世において作仏すると主張した。又、

問う、仏滅度の後、羅漢解義の人に値わずして直に法華経を聞くも、亦信解することを得るや不や。答う、此の事明め難し。設使経に遇うとも解義の人に値わずんば、亦了了分明に解することを得ざるなり。是の故に文に云く、若し余仏に遇わば方に乃ち決了せんと。（中略）、終に畢竟して永く羅漢に住するものあることなし。必ず法華経を聞くことを須って後に当に作仏すべし。汝等大衆今に及んで仏に値い復経を聞くことを得たり。早く須く信受すべしとなり。（前同頁）

と、「解義の人に値わずして直に法華経を聞く」、この場合でも羅漢が一乗を信解出来るかどうかと云う事である。吉蔵は解義の人に会い、その人から法華教を直接聞かなければならないと考え、今釈迦から直接法華教を聞く事が出来るのだから、早く信受すべしと註釈する。即ち、人法の両縁に会わなければならないと考える。その理由は、

仏の滅度の後には法華経聞き難く解し難きを以て、阿羅漢の作仏すること、此の人得難し。智度論に云く、法華は羅漢作仏の義を明し、最も甚深なり。羅漢の作仏は唯仏のみ能く解したまえば、論者は正しく其の余の事を論ずべしと。竜樹すら尚解せずと云う。故に知んぬ、唯仏のみ能く解したもうということを。所以に此の人得難し。人法の両縁に値わざるを以ての故に、此の羅漢は一乗を信ぜざるなり。（中略）、故に羅漢の作仏は最も難解となす。唯仏のみ之を知りたもうが故に難得と称するなり。（前同、T三四・四九八中―下）

と、「方便品」の「仏滅度後、如レ是等経、受持読誦解義者、是人難レ得」[15]の文、或は『智度論』[16]の文を引用し、羅漢の作仏は唯仏のみが理解出来ることで、凡夫下愚の知る所ではない為とする。即ち「人法の両縁に値わざるを以ての故に、此の羅漢は一乘を信ぜざるなり」とある様に、羅漢が一乘を信ずる為には、法のみならず羅漢作仏を知る解義の仏に会う事も必要であると主張するのである。

四　本学小乘と退菩提心の声聞

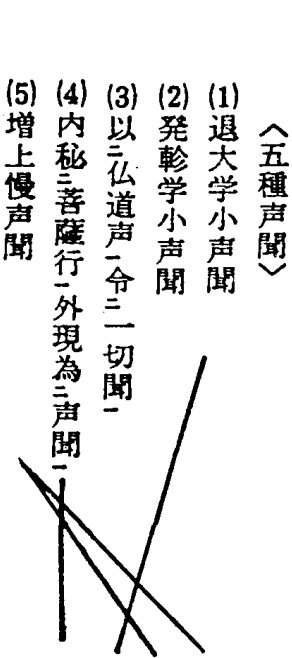
それでは義解の仏から直接法華教を聞いて、一乘に悟入出来るのはだれかと云うことになる。吉蔵は声聞を「五種声聞」に分類する。

次明二五種声聞得記不得記義一、一者退レ大学レ小声聞、如二身子之流一、二者発軫学小声聞、三者以二仏道声一令二一切聞一、四内秘二菩薩行一外現為二声聞一、五増上慢声聞、（後略）、（法華玄論、巻第七、T三四・四二一下）

又吉蔵は、「晩見レ論明二四種声聞一」と、『法華論』の「四種声聞」を続けて引用している。

一決定声聞、二増上慢声聞、三退菩提心声聞、四応化声聞、決定声聞者、即是本学二小乘行一得レ証二四果一故名二決定声聞一、増上慢者、不レ得二四果一妄謂言レ得、此二是小乘中得不得二也、退レ大為レ小及応化為レ小、此二就二大乘中一明二得失一、故有レ二也、此四摂二一切声聞一皆尽、与二上五種一不二相違一、但広略為レ異耳、（前同、T三四・四二二上）

即ち決定と増上慢は小乘に関わり、退大為小と応化は大乘に関わると述べる。この『法華玄論』の五種声聞と、『法華論』の四種声聞は、次の様に対応する。



吉蔵が、「此四摂二一切声聞一皆尽、与二上五種一不二相違一、但広略為レ異耳」とは云うものの、「五種声聞」中の「発軫学小声聞」は、「四種声聞」と対応するものがない。[17]「発軫」とは、出発点の意[18]で、最初から小乘だけしか学ばない声聞の事である。先に『宝窟』の文、

声聞蔵を説くも、亦二人の為なり。一には本乘声聞、二には退大取小なり。（T三七・六中）

を引用したが、「本乘声聞」が発軫学小声聞に相当し、「退大取小」が退大学小声聞に相当する。又、

声聞唯有二二種一、一本学二小乘一、二退レ大為レ小、（後略）、（法華玄論、巻第一、T三四・三六九中）

とあることから、発軫学小声聞の事を「本学小乘」と呼んだ方が意味が明確になるかもしれない。

この本学小乗（本乗声聞・発軫学小声聞）と退大学小（退菩提心声聞・退大取小・退大証小）の二種の声聞が、法華教にて、廻小入大の菩薩となる対象である。『法華義疏』中には、次の様にその役割を述べている。

但し声聞に二種あり。一には本乗の声聞、二には退大証小の声聞なり。二種の人の為に二種の説を明す。本乗の声聞の為に直ちに現在の法門を説く。謂く現在に三乗の根性あって三界火宅の中に在り。権に三車を説いて引いて出づることを得せしむ。既に宅を出づることを得れば、更に種種の方便を以て其の心を調伏し、小志漸く移り大根稍熟せしめて、然る後に仏慧を説き初めて信心を起さしむ。上の法譬の二周には多く斯の意を明す。謂く本乗の声聞を化するなり。二には退大証小の声聞の為に過去世の法を説くに凡そ三時あり。一には初めて大乗を学びし時、二には大を退いて小を取りし時、三には小を捨てて大を悟る時なり。現在に化城の譬を説くも亦三時あり。一には初めて大乗を説きし時、二には中途に小を説きし時、三には後還って大を説く時なり。此の如きの説は多くは退大証小の声聞の為なり。故に声聞は二種を出です。三周は唯此の両門なり。此は皆大判にして言をなすのみ。互に前後に通ず。（巻第八、T三四・五六八上―中）

即ち三周中の法説と譬説は主に本学小乗の声聞を化し、亦法亦譬の化城譬は、主に退大証小の声聞を化すと述べる。この様な内容は『法華玄論』中にもある。

但声聞有二種、一発軫学小、二者退大為小、三車為発軫学小人令出三界当得三乗、若化城譬者、為退大為小人本求二仏乗一憚二仏道長遠一欲退受人天之楽故、於二中路一為二止息一説二涅槃一也、然通而為論、二文皆含二両義一、取二其正意一則如二向説一也、（巻第七、T三四・四二三上）

即ち法華経の方便品・譬喩品・化城品等は、本学小乗と退大為小の声聞の為に説かれるものである。又この為、

答、雖有二五種声聞一、但法華教起正為二二人一、以発軫学小令二改小而信大、退大為小亦令還学本大、故但為二二人一也、（前同、T三四・四二三中）

と、法華教は、発軫学小と退大為小の声聞を、一乗に導く為のものであると明言する。

この本学小乗と退大為小の声聞が、法華教にて廻小入大の菩薩となることに関して、次の様な文がある。

今総じて問う、法華経の三周、乗権乗実を明かして、声聞の人、未だ法華を聞かず、自ら究竟と保す若し法華を説くを聞かば、廻心して大に入り、方に自ら作仏を知ることを弁ず。今、此の経に三乗の初業は法に愚ならざる者は当に覚すべく、当に得すべしと云う。云何が会通せん。答う、有人言く、声聞に二種あり。一には愚法、二には不愚法。不愚法の人は、謂く、退菩提心の声聞なり。愚法の人は、謂く、本乗の声聞なり。本乗の声聞は自ら究竟と保し、一乗を説くを聞いて方に作仏を知る。不愚法の人は自ら作仏を知ると。（宝窟、巻下之末、T三七・八〇上）

問いの内容は、法華教の三周説等にて声聞が廻小入大する事と、『勝鬘経』の「三乗初業、不愚於法、於彼義当覚

当レ得」[19]の文の内容を、どの様に会通するかと云うことである。「有人説」では、愚法とは本学小乗の声聞の事で、一乗を聞いて作仏を知ると説き、又不愚法とは退菩提心の声聞の事で、自ら作仏を知ると説く。この有人説に対し吉蔵は、次の様に否定する。

今須らく之を難ずべし。法華経に云く、舎利弗等一切の声聞、皆自ら究竟と保す。法華を説くを聞いて方に作仏を知る。云何が乃ち舎利弗等の一切の声聞を取って愚法の人と為るや。此れ一の不可なり。又舎利弗等は即ち是れ退菩提心の声聞なり。何れの処にか、此に離れて已外、更に不愚法の人あらん。此れ二の不可なり。（前同頁）

即ち、舎利弗等の一切の声聞は法華を聞いて作仏を知ったのだから、有人説の定義で行くと、舎利弗等は愚法の人となってしまう。又更に舎利弗は本来退菩提心の声聞だから不愚法の人のはずであると有人説を否定する。

それでは吉蔵はどの様に主張するのか。

今明さく、本乗の声聞と退菩提心の声聞と、並に是れ愚法なり。然る所以は、夫れ自ら作仏を知れば必ず羅漢を証せざらん。若し羅漢を証すれば則ち自ら究竟と謂いて作仏を知らざるなり。二種の声聞並に羅漢を証して自ら究竟と謂うは、悉く是れ愚法なり。此の二人、若し一乗経を聞いて、小を廻して大に入り、自ら作仏を知るは、皆是れ不愚法なり。二人の中に於て根性無量なり。或は利、或は鈍、大に入るに早晩あり。若し小を廻して大に入るは並に是れ不愚法なり。（宝窟、巻下之本、T三七・六〇上）

即ち吉蔵は、本学小乗と退菩提心の二人の声聞が、羅漢を証して究竟であると思い込んでいる時は愚法の人であると説く。しかしこの二人の声聞が、仏に会い一乗を聞いて、廻小入大し作仏を知るならば、不愚法に転換すると主張し、有人説を否定する。

それではこの本学小乗の声聞と退菩提心の声聞とでは、どの様な相違があるのか。

問う、二人何が異なる。答う、本乗の声聞は昔大乗を聞かず、未だ菩提心を発さず、一乗の種子なし、無余に入りつ後、仏に値い経を聞いて、方に乃ち菩提心を発す。退菩提心の声聞は、昔曾て一乗を聞き菩提心を発して一乗の種子あり、但し中途に大乗を退して小を取る。現在に一乗経を聞き、続いて菩提心を発し、自ら作仏を知る。故に二人異なると為す。（前同頁）

即ち本学小乗の声聞は、過去に大乗を学ばなかったから、現在一乗の種子がない。未来、無余涅槃後、仏に会い法華教を聞き、菩提心を発す。しかし退菩提心の声聞は、過去に一乗を聞き菩提心を発したが、小乗に退した。この故に一乗の種子があり、法華の教えを聞くことにより、現在において菩提心を発し、作仏を知ることが出来ると主張する。又『法華玄論』には、本学小乗と退菩提心の声聞の二人の差異を次の様に記す。

但此二人優劣不レ同、初人已曾発心、但発心未二成就一故名二未発心一、第二人都未二発心一也、（巻第七、T三四・四二一下）

即ち退菩提心の声聞（初人）は曾って発心した事があるが、本学小乗（発軫学小、第二人）は発心した事がない。或は、

答、初人但得レ信二仏語一耳、第二人随二位浅深一也、（前同、T三四・四二三中）

と、本学小乗の声聞（初人）は、仏語を信ずるだけだが、退菩提心の声聞（第二人）は、更に菩薩の階位に随うと述べ、『宝窟』の内容に相応する。又退菩提心の声聞に、一乗の種子が残っていることに関して『法華論疏』中に、

過去発二菩提心一行二菩薩行一、中間雖レ退而菩提心種子不滅、如二摂大乗論云一、此種子並附二著梨耶一、（巻下・卍一・七四・二・一九〇a）

と、一乗の種子が阿梨耶識に附著していると記している。

即ち、法華教にて廻小入大する声聞は、本学小乗と退菩提心の二人である。退菩提心の声聞は過去に大乗を学んだが故に一乗の種子があり、現在に於て、仏より法華教を聞き菩提心を発し作仏を知る。しかし本学小乗の声聞は一乗の種子がないが故に小乗を改め大乗を信じ大乗の種子を得、無余涅槃後、仏より再び法華教を聞き菩提心を発し作仏を知る。

五　決定声聞と増上慢声聞

先に論じた五種声聞、或は四種声聞中の決定声聞と増上慢声聞に対して吉蔵は、不成仏と考えている。まず決定声聞が成仏出来ない理由は、小乗に封執し、菩提心を発しないからと考える。即ち、

答う、法華論に云く、凡夫の善、及び決定声聞の善は仏因に非ず、成仏を得ず。要ず菩提心を発して菩薩の行を行ずる善を取り、三僧祇を満して、方に作仏を得んと。（宝窟、巻上之末、T三七・一八下）

と、『法華論』の

謂発二菩提心一行二菩薩行一者、所作善根能証二菩提一、非二諸凡夫及決定声聞本来未発菩提心者之所二能得一、（T二六・七下―八上）

の文を引用し、未発菩提心の決定声聞は成仏出来ないと主張する。又『法華義疏』中にも、

問う、若し爾らば、決定の声聞の善根は応に菩薩の道に非ざるべきや。答う、決定の人は即ち是れ教を守って小果を封執すれば、即ち破を被って会せず。若し転じて悟れば、即ち会して而も破せざるなり。（巻第八、T三四・五六五中）

と、決定声聞は二乗の教えを封執し、一乗の教えを聞こうとしない。「一乗教は則ち是れ発菩提心の縁なり」[20]と云う一乗を聞かないが故に、決定声聞は成仏出来ないと主張するのである。

次に増上慢の声聞も成仏出来ないと、次の様に論じる。

以下増上慢人未レ得二究竟一、自謂中究竟上、不レ受二仏語一（法華論疏、巻中、卍・一・七四・一・二・一八二c）

即ち増上慢声聞は、未得究竟を究竟と云い、仏語を受けつけないと云う。どうして未究竟かと云うと、

断二小乗中諸煩悩一尽故名二無煩悩人一、而望二大乗一猶有二煩悩一為二大乗煩悩一、所レ染故称為レ染、未レ得二究竟一自謂二究竟一、以二此自高一称レ之為レ慢、（法華論疏巻下、卍・一・七四・一・二・一八四c）

と、たとえ小乗中の諸の煩悩を滅し尽したとしても、大乗に望めば煩悩がある。しかしそれなのに滅し尽し究竟を得たと自から高うする輩を増上慢と云い、作仏を信じないから、成仏出来ないと主張する。

この決定と増上慢声聞に対し、『法華義疏』には、次の様に記す。

決定と増上慢との二人は、根未だ熟せざるが故に仏授記を与えず。然して決定の声聞は小乗を保執し、増上慢の人は自ら究竟と謂いて作仏を信ぜず。即ち記を与うるに堪えず。亦破執及び会帰の義に堪えず。而も此の経が一切の二乗を会して以て成仏せしむとは、蓋し是れ応に悟るべき人に対するが故に、此の経を説いて破及び会の義を明すのみ。（巻第八、T三四・五六六上）

即ち決定声聞と増上慢声聞は、機根が熟していないから授記に堪えない。又「而此経会二一切二乗一以成仏者、蓋是対二応レ悟之人一故、説二此経一明二破及会義一耳」と、この法華教は、「応に悟るべき人に対するが故に」説くのである。小乗を保執し、作仏を信じない決定と増上慢の声聞は対象外であると主張する。

所で『法華玄論』には、三種の増上慢声聞を記す。

増上慢声聞有二三種人一、一者亦得レ聞レ経亦得レ授レ記、如下常不軽菩薩為二増上慢声聞一説二法華経一及為中授記上、此是未発心授記也、二者不レ得レ聞レ経不レ得二授記一、如下釈論所レ出得二四禅一者上、此人命終堕二無間獄一也、三者得二髣髴聞一而不レ得二授記一、則五千之徒得レ聞二略説一而不レ得レ記也、（巻第七、T三四・四二一下―四二二上）

まず二番目の「不得聞経不得授記」の増上慢声聞が、今まで述べて来た決定声聞の事である。『釈論』の原文は、

仏弟子中亦有二一比丘一、得二四禅一生二増上慢一謂レ得二四道一、得二初禅一時謂二是須陀洹一、第二禅時謂二是斯陀含一、第三禅時謂二是阿那含一、第四禅時謂レ得二阿羅漢一、恃レ是而止不二復求進一、命欲レ尽時見レ有二四禅中陰相一来二更生二邪見一、謂下無二涅槃一仏為中欺レ我、悪邪生故失二四禅中陰一、便見二阿鼻泥犂中陰相一、命終即生二阿鼻地獄一（巻第十七、T二五・一八九上）

である。先に示した『法華論』の決定声聞の定義は、

決定声聞者、即是本学二小乗行一得レ証二四果一故名二決定声聞一（法華玄論、巻第七、T三四・四二二上）

であり、『智度論』の云う増上慢声聞の事である。先に「五種声聞」と『法華論』の「四種声聞」を対応させた時、四種声聞中の決定声聞を五種声聞中の増上慢声聞中に含ませたの

は、この理由による。

次に残る第一と第三は同じ増上慢であるが、異なる。第一の増上慢は、常不軽菩薩所対の増上慢で、「亦得レ聞レ経、亦得レ授レ記」と、法華教を聞き授記を得ることが出来る。しかし第三の増上慢は、「方便品」中に出て来る五千人の増上慢で、「退亦佳矣」[21]と釈迦から退席を黙認された増上慢である。この為法華教を聞く事が出来たが授記を得られない増上慢である。『法華義疏』中にはこの為に、常不軽菩薩所対の増上慢と、五千の増上慢を明確に区別する文がある。

増上慢も亦爾なり。五千の徒の如きは破と会とを聞くに堪えず。根未熟なるを以ての故なり。常不軽所対の増上慢は其の根已に熟して破と会とを聞くに堪う。故に為に一乗を説くなり。（巻第八、T三四・五六六上）

即ち五千の増上慢の声聞の場合は、根未熟の故に法華教にて会三帰一の対象外であるが、常不軽菩薩所対の増上慢は、機根が熟しているが故に一乗を説くと主張する。

同じ増上慢の声聞でも、五千の増上慢は「応に悟るべきの人に対する」外と考え、「退亦佳矣」と黙認される。退席する理由を次の様に『法華義疏』では述べている。

是の故に釈して云わく、五千は罪根深重にして十方の諸仏抜済すること能わず、是の故に退席す。（巻第三、T三四・四九三中）

即ち五千の増上慢は罪根深重であるから、諸仏と云えども救うことが出来ないからである。その救済出来ない理由は、

諸余の声聞は但執小の失のみあって、未だ小果を得ざるに小果を得たりと謂うことあることなし。是の故に余人は座に在れども五千は退席す。（前同、T三四・四九三下）

と、他の声聞は執小の失だけであるが、増上慢の場合には更に、小果を得ずして得たと云う失がある。これが罪根深重で、諸仏が救済出来ない理由である。又たとえ五千の増上慢が法華の座に居たとしても、

五千人の如きは法器の用なくして、能く一乗を聞くと雖も菩提心を発し菩薩行を修して仏業を紹ぐこと能わず。是の故に用なし。（前同頁）

と、仏の説く一乗教を聞いても菩提心を発し菩薩行を修しないから無用であると説く。又『法華論疏』には次の様に記す。

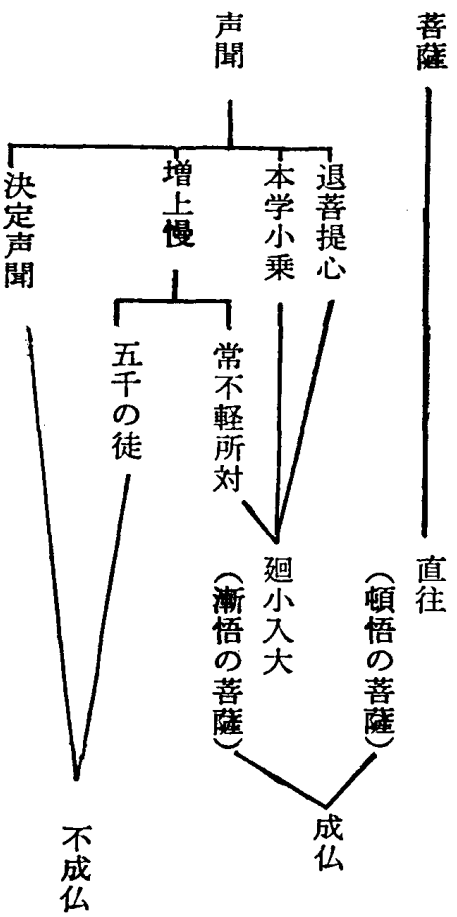
答、増上慢人若在二法席一即為二大衆一作二障道因縁一、不レ得二授記一故須レ令二其離レ席、又衆見二罪人離レ席、弥生二重レ法尊レ人之心一、又深自発心、得レ聞二勝法一。（巻中、卍・一・七四・一・二・一七八a）

即ち五千の増上慢が法華の座にあっては、他の大衆の為に「障道の因縁」となる為、離席を黙認した。又五千の徒が離席したが故に、他の大衆に重法尊人の心が生じ、法華の勝法を真剣に聞く心が生ずる為と説いている。

以上の様に、小乗に封執し菩提心を発しない決定声聞と、未得究竟を究竟と云う増上慢の五千の徒は、法華教にて一乗に入ることの出来ない不成仏の声聞である。

結言

以上の事をまとめると、吉蔵は根性を不定のものと考え、仏から直接法華教を聞く事が必要で、聞くか聞かないかで、成仏と不成仏の分かれ目となる。直往の菩薩は頓悟であるが、廻小入大の菩薩は漸悟である為に、三蔵経、般若経等の教えを経て、法華教にて一乗に入る。法華教にて廻小入大の菩薩となるのが、本学小乗と退菩提心の声聞である。しかし小乗に封執することが極めて堅牢な決定声聞と、五千の増上慢は仏語を受けず、一乗に入ることが出来ず不成仏である。ただ常不軽所対の増上慢声聞は、最終的には菩薩となる。以上を図にて示すと次の様になる。



所で慈恩の法華経観は、

答う、梵本に依って説かば、経の頌は第二第三無しと言うべし。三乗を数うる中、独覚を第二と為し、声聞を第三と為す。不定を引き所余を任時するが為の故に、方便をもって第二第三無しと言う。真に破するには非ざるなり。（義林章、巻第一之末、T四五・二六七上）

等の文により、「三乗不定種姓を勧発誘引せんがため」[22]と云う様に、声聞や独覚の不定姓の菩薩を一乗に導くと考えている。この点以上論じて来たごとく吉蔵も、「蓋し是れ応に悟るべきの人に対するが故に、此の経を説いて破及び会の義を明すのみ」と、①法華教が悟るべき対象である本学小乗と退菩提心の不定姓を一乗に導く為のものと考え、②仏の教えを聞きいれることのない決定と増上慢の声聞は、一乗に導く対象外の人であると考えている。この不定姓を法華教にて一乗に導くと云う点では、吉蔵も慈恩も同一の考え方である。吉蔵の思想をより明確にする為に、『法華義疏』のみならず、『勝鬘宝窟』『法華玄論』『法華論疏』の内容を引用したが、『玄賛』や『義林章』が参照引用する『法華義疏』の内容だけであっても、同一の事が証明出事る事は勿論である。

この様な吉蔵と慈恩の不定姓に関する類似思想は、今まで知らなくても仕方がない。しかし、「方便品」の「無二亦無三」[23]の文に対し、吉蔵も

答う、前に二なしと明すは縁覚なきを謂い、三なしとは声聞なきを明す。即ち是れ今の文には、二ながら真実に非ずというなり。

但上には其の俱になきことを明し、今は方便して有と説けども但真実の有に非ざることを明すのみ。（法華義疏、巻第四、T三四・五〇二中）

と、慈恩同様に、二を縁覚に、三を声聞と解釈し、同一主張であることはあまりにも有名な事柄である。しかるに玄賛の解題内容は、この様な吉蔵と慈恩との思想的同一性を一顧だにせず、更に天台の法華疏と玄賛の引用関係を明示せずに、慈恩の思想が天台と異なると云う理由を以て、「天台家に対する対抗意識が濃厚に働いている」と云うのである。例えば「方便品」の「十如是」に関して、

其筆録者なる章安大師示寂の年（六三二）に生れた慈恩三蔵が、法華の注釈を書きながら殊更に十如是を避けて五何を説明し、五何に十如是を隷属せしめている心理が見えるようである。原典的には五何を説くも差支えないが、苟しくも妙法華経の玄賛である限り十如是の釈をなすが常道であるのに、法華論を楯として是を避けた所に天台を難じつつ而かも天台から受けている強い影響が認められると思う。(24)

と云う内容であり、この考えの前提には、当時の天台思想の影響が、他に対して極めて強いと云う思い込みの上に、仮説を立てている。しかし後代の天台思想の影響の強さは認めるとしても、慈恩の時代には、天台思想の影響が全くなかったと考えたらどうか。この様に考えた場合、「天台家に対する対抗意識が濃厚に働いていた」と云う様な何の確たる論証もない単なる仮説は、これだけでもって消滅する。この様な事を主張するのは、『法華文句の成立に関する研究』により、『文句等』の成立が、灌頂その他の門人によって成立したと云う事が論証されたからである。(25) この為、灌頂示寂の年に慈恩が生れたからと云って、慈恩が成立年時不明な天台疏を見たと云う根拠にはならない。解題説が成立するには、少なくとも玄賛が天台疏を参照したと云う明確なる証拠が必要である。それから初めて、慈恩は天台家に対抗意識を働かしたか、或は吉蔵の思想を継承したかが論議されるのであって、現時点においては、三論の影響を受け継いでいると考えた方が、より理に適っている。この様な根拠不明な天台至上主義とも受けとれる従来の固執観念は、この際見直すべきである事を、『法華文句の成立に関する研究』は提示している。

従来は、「無二亦無三」の解釈が、法相と吉蔵では同一である事のみが指摘されていた。しかし今回、法相の「五姓各別」と云う重要な内容も、吉蔵の思想中に基本的にあることが論証出来た。ただ応化の声聞や独覚について、又正因仏性・縁因仏性との関係等の事を論ずる紙数がなかったので、これらの件に関しては、後日論じたい。

註

（1）『曹洞宗研究記要』第十七号、昭和六十一年二月参照。

（2）布施浩岳、和漢撰述4、経疏部四、三頁等。

(3) 平井俊栄著、はしがきii頁。
(4) 註2同書四頁。
(5) 平井俊栄著『中国般若思想史研究』五〇〇頁以下参照。
(6) 『宝窟』巻上之本、T三七・六上
(7) 五姓各別に関しては、保坂玉泉「五姓各別と成仏不成仏の問題」『駒沢大学研究紀要』第一六号、昭和三三年三月参照。
(8) 『法華義疏』巻第七、T三四・五五二中―下
(9) 「或有下服二甘露一、傷レ命而早夭上、或復服二甘露一、寿命得二長存一、或有二服レ毒生一、有二縁レ服レ毒死一、無礙智甘露、所謂大乗典、如レ是大乗典、亦名二雑毒薬一、(南本涅槃経、巻第八、T三四・六五〇上)
(10) 駒沢大学仏教学部論集第十七号、昭和六十一年十月、三二〇頁以下参照。
(11) 「一乗章第五」(T十二・二二〇下)
(12) 「問曰、阿羅漢先世因縁、所受身必応二當滅一、住二在何処一而具二足仏道一、答曰、得二阿羅漢一時、三界諸漏因縁尽、更不三復生二三界一有二浄仏土一出二於三界一乃至無三煩悩之名一、於二是国土仏所一、聞二法華経一具二足仏道一、如二法華経説一有二羅漢一若不レ聞二法華経一、自謂レ得二滅度一、我於二余国一為説二是事一、汝皆当二作仏一」(大智度論、巻第九十三、T二五・七一四上)
(13) 「我滅度後、復有二弟子一不レ聞二是経一、不レ知二不レ覚三菩薩所行一、自於二所得功徳一生二滅度想一、当レ入二涅槃一、我於二余国一作仏、更有二異名一是人雖下生二滅度之想一入中於涅槃上、而於二彼土一求二仏智慧一、得レ聞二是経一、唯以二仏乗一而得二滅度一更無二余乗一」(巻第三、T九・二五下)
(14) 「若有三比丘実得二阿羅漢一、若不レ信二此法一、無レ有二是処一、除二仏滅度後現前無レ仏、所以者何、仏滅度後、如レ是等経、受持読誦解義者、是人難レ得、若遇二余仏一於二此法中一便得二決了一、舎利弗、汝等当四一心信二解受三持仏語一」(巻第一、T九・七下)、
(15) 註14参照。
(16) 「答曰、般若波羅蜜非二秘密法一、而法華等諸経説二阿羅漢受決作仏一」(巻第一〇〇、T二五・七五四中)。
(17) 富沢慶栄「吉蔵の声聞成仏考」(天台学報第十九号、昭和五一年)が参考になった。但し富沢氏は発軫学小声聞と決定声聞が同じだと考えられている(一三七頁)。何かの誤解と思われる。
(18) 『諸橋大漢和辞典』には、「発軫」を車を出す、旅だちすること、転じて出発点の意とある。
(19) 「顚倒真実章第十二」(T十二・二二二上―中)
(20) 註10参照。
(21) 「会中有二比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等一、即従レ座起礼レ仏而退、所以者何、此輩罪根深重及増上慢、未レ得謂レ得、未レ証謂レ証、有二如レ此失一是以不レ住、世尊黙然而不二制止一、・・如レ是増上慢人、退亦佳矣」(巻第一、T九・七上)
(22) 藤隆生「三乗唯識の一乗観」天台学報第六号、昭和三八年、(六二頁)
(23) T九・八上
(24) 註2同書解題六頁。
(25) 註3参照。